

## 鎌倉教室講演會報告

やまうちゆうこ  
山内祐子

平成二十七年九月二十八日

眞夏の鎌倉にて講演會を催す。嘗て天下の文士數多  
住まひける地にて「今なぜ文語なのか」と題し我國精  
神文化遺産たる文語の復興運動を講師として御招き  
の愛甲次郎先生熱く語りたり。徳富蘆花『自然と人  
生』一節の朗唱、聞入る參加者四十名を日常語と異な  
る文語の世界に導く。其要旨次の如し。時空を互る  
命永き文章語を書く折、何人も的確に美しく表現せむ  
と先人の名文を鑑に文章を練る。民族の心の入れ物、  
國語は先祖代々積み重ねたる言語傳統の努力の結晶  
なり、と。「それ文語文は口語の俗に比すれば雅、冗  
長ならずして直截に、筆者が思考、感情を傳へ、しか  
も讀む者をして筆者が心中の陰影をも感得せしむ」文  
語の苑趣意書）  
教育の要諦は古典素讀なり。名文は讀者の心を掴み

放さじ。繰返し祖先の書き遺したる古典を暗誦せば  
何れ節目にその記憶蘇り智慧と化す。されど産業革  
命以降、富國強兵を旨指す大衆教育始まるや、明治維  
新、國の存亡を近代化推進、大衆教育に賭す。言文一  
致運動起り明治末より文語衰退の一途なり。七十年  
前、占領軍施政下、漢字制限及び歴史的假名遣廢止の  
國語改革實施、遂に文語の傳統亡ぶ、と。

國語の核を成すは文語なり。祖先の魂宿る「人間須く  
斯くあるべし」の集大成たるは文語なり。文語遺産を  
保存、次世代に繼ぐ事は喫緊の課題なり。平成十五年、  
文語の素養ある有志にて「文語の苑」運動を興せり。  
電腦空間にて文語作文發表の場を開設。入門教材を  
作り次世代に普及を圖る。世界に冠たる文語の美し  
さを広く知らしめ文語の趣味の會を作らむと愛甲講

師説き畢んぬ。

昨秋、鎌倉教室設立、愛甲先生の御指導を仰ぐ。蘆花の湘南の風光を描く名文に共感したる友人數名、文語作文を拙くも臆せず書く。自ら書きたる作文を丁寧添削賜る機會を得たるは、實に貴重なる體驗なり。書く度に文語に慣れ親しみ文語讀解深まる。今秋より『明治大正文語五十撰』を繕く會員を募る。

後半、加藤淳平講師による文語詩講義。小學唱歌、軍歌、翻譯詩より始る明治期の新體詩の變遷を承る。抒情豊かなる初戀の詩より叙事詩に至る十七詩を參加者共に音讀、言葉の響いと心地よし。明治期を偲ぶ永井荷風「震災」、沖繩特攻隊を悼む折口信夫「海の幻」、占領終結時再獨立を祝す齋藤茂吉「日本のあさあけ」の力作あり。近代史に育まれたる情感心に沁入る。斯かる文語詩我等共有の遺産なり。「日本のあさあけ」は昭和二十七年四月末、祝典曲とし

て委囑せられし茂吉最晩年の作、信時潔作曲にて只一度演奏。七年占領後、漸く再獨立する喜びに「もろとも」祝はがざらめやも、國民共に祝はずにをられむかと。されど當時國民に再獨立を祝す氣運乏し。米國に阿ねたる勢力大なり。新聞は占領期の言論規制を繼續、慶祝行事を無視す。今尙米軍占領を「解放」、我國のみ惡しといふ洗腦の呪縛解けず眞の自由未だ回復せず。此十年來漸く洗腦の呪縛を自覺したる國民微増す。我國本來の姿に自覺め獨立國として再出發の自覺を強く持つ秋なり、と。

兩講師の講義に學ぶ。「祖國は國語」、國語は民族の魂なり。記紀萬葉、聖德太子、千年前平安宮中文化を描く『源氏物語』、武士の榮枯盛衰を語る『平家物語』、江戸國字より明治期に至る豐饒なる文語遺産あり。西洋近代を手本に國民國家建設したる明治期、英獨佛語を的確に翻譯、日本語にて近代教育を施し議論し得る國語に作り變へたる先達の勞大なり。されど國語の

核心たる文語喪失は民族の魂の喪失なり。

敗戦後七十年、國語國史は風前の灯火なり。古典愛讀者激減、我國精神文化衰退。占領期國語改革、教育改革の悲劇、此處に極まれり。人の生死に關る如き事態に直面、或は日常を超えたる精神の深遠を求めたる時、國運危急存亡の時、何れも文語といふ祖先の珠玉の精神遺産無くして精神の深み高みに達する能はざれば道を失ふ。高貴なる日本人の魂、今何處に在りや。鎌倉に「文語の苑」の據點を作らむと情熱傾け給ふ愛甲先生の御厚志忝く承り「文語の苑」發展を共に祈る講演會の企畫、幸ひにして盛會なり。